

4 養鶏農場における高病原性鳥インフルエンザ対策

鳥取県西部家畜保健衛生所 ○長千恵 中口真美子

1 はじめに

高病原性鳥インフルエンザ（HPAI）は、今年度国内の野鳥においてウイルスの確認及び養鶏農場での発生が相次ぎ、現在も養鶏農場での発生の危険性が高い状態にある。

管内養鶏農場に対しては、毎年 HPAI の注意を喚起し、HPAI 発生防止上、必要な衛生対策を指導している。年を追うごとに改善され、指導が必要な農場は減少しているが、本年度 10 月に行った 1 回目の巡回終了時点で、いまだ要改善として指導した農場があった（図 1）。

図 1 には、管内で指導した主な指導項目を記載している。これらの項目の中で、1 鶏舎専用長靴の未設置、2 鶏舎の破損、3 防鳥ネットの破損に対する対応の遵守は、HPAI 発生防止上、必要不可欠であり、農場におけるこの 3 つの項目の改善は急務と考えられた。

そこで、今回は管内において、この 3 つの項目に対する要改善農場を早急になくすため、各項目ごとに改善できない理由や農場内の問題点を農場側から詳細に聞き取りを行うことで本質的な問題を洗い出し、効果的な対応策が見出せないかを模索した。

指導項目	平成24年 10月 (全37農場中)	平成26年 10月 (全42農場中)
1 鶏舎ごとの専用長靴の未設置	22	4
2 鶏舎の破損	11	3
3 防鳥ネットの破損	6	5
4 立ち入り禁止看板の未設置	10	1
5 来場者記録簿なし	12	4

2 聞き取りによってわかった、農場の問題点

①鶏舎ごとの専用長靴の未設置

この項目に対し、要改善農場はすべて鶏舎出入り口が狭い、サービスルームがないなど、鶏舎の構造上、長靴の設置箇所がないという物理的な問題があった。

しかし、農場側にはこの問題に対し、積極的に改善をしようという意思があまりなく、また、鶏舎に出入りする従業員にまで、専用長靴の必要性が正確に周知されていないこともわかり、この問題には、単なる場所の問題だけではない、HPAI発生に対する現実的な危機感の低さが根底にあると考えられた。

②鶏舎の破損

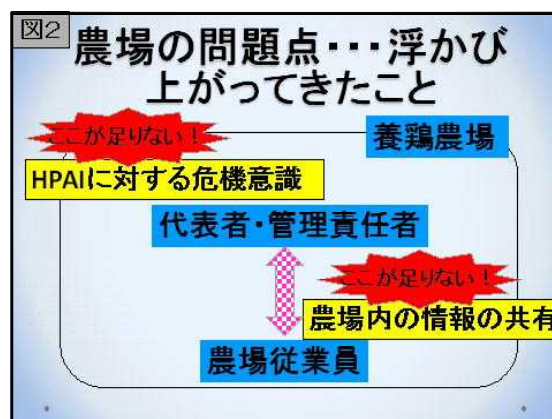
管内の鶏舎は、老朽化が進み、大規模な改修が必要な鶏舎が多く存在したため、その決定権を持つ、代表者や管理責任者などの農場上層部に、改修の必要性を理解してもらう必要があった。しかしながら、系列農場が多数に登るような大規模農場にその傾向が強かったが、農場上層部が現場である鶏舎の現状を把握していないというケースが見られた。また、従業員からの聞き取りでは、HPAIに対する衛生対策の技術や知識の不足から、具体的にどの箇所をどのように修繕したら良いかわからず、修繕が的確に行われていないこともわかった。

③防鳥ネットの破損

破損箇所の修繕技術などの不足という点では、②の鶏舎の破損と同じ問題が考えられたが、防鳥ネットは鶏舎と比較して、破損に気づきにくく、また暴風雪などでも破れやすいため、修繕が追いつかないという問題があった。そのため、本来は鶏舎を管理する従業員が日々気を配り、補修する必要があるが、聞き取りしたところ、その必要性が従業員にまで周知されておらず、改善が行われていないことがわかった。

以上、3つの項目から要改善農場の問題点を洗いだしたところ、一つは、HPAIに対する危機意識が不十分であること。もう一つは、代表者や管理責任者が現場である農場の現状を把握していなかったり、HPAIに対する知識や情報が、農場の従業員にまで周知されていなかったりと、この2者の間の情報の伝達、および共有の不足が問題として浮かび上がってきた(図2)。

この2点の問題を、家保が働きかけることで改善できれば、結果として、農場の衛生対策も改善が進むのではないかと考え、今回の指導では、まず、この2つの意識改革を十分にすることを意識し、対応することにした。



3 農場改善へ向けてのアプローチ

①HPAIに対する危機意識の改善

農場代表者に対しては過去にHPAIが発生した事例の疫学調査の資料を提示し、実際にHPAIが発生した場合、どのような調査が行われるのかなどを示し、より具体的な危機感を感じるよう促した。また、農場の従業員には、勉強会の開催や巡回時、できるだけ多くの従業員と接触し、直接話をする事で理解してもらうよう努めた。家保は巡回時、すべての従業員と直接話をする事は難しい。しかし、できるだけ家保職員が対面で伝えることで、今年度のHPAIに対する危機感をより感じてもらうことを意識した。さらに、家保からの情報提供は、危機感を維持してもらうことを意識し、最低でも週に1度を目安に頻回に行い、農場側にはすべての職員に情報が行き渡るよう指導した。

②農場内の情報の共有不足の改善

農場に対する指導、指摘は今まで口頭で行っていたが、今年度の巡回からは、巡回結果や改善案など、農場側に伝えたい情報は、紙面で提供することとした(図3)。これは、代表者側、現場の農場側のどちらにも同じ情報が共有できるようにし、こちらの意図が正確に伝わるよう意識したためである。紙面においても写真を多用し、視覚的な訴えを最大限利



用するようになった。

これらのことを実施したところ、改善が見られた点を下記に示す。

4 農場における改善点

①鶏舎専用長靴の未設置

長靴の置き場所、置くための方法など、具体的な改善案を農場側に紙面で示したところ、未設置だった4農場すべてにおいて、家保が提案した場所、方法で長靴が整備された（図4）。さらに、今回は鶏舎専用長靴の必要性もすべての従業員に周知していたため、設置後の実際の履き替えもスムーズに行われるようになった。今回提案した設置案は、出入り口が狭く場所がないとしていた農場は、農場側と現場で協議し、使われていなかった道具などを撤去してもらい設置箇所を作った。肉用鶏農場ではサービールームがないために設置する場所がなかったが、それも鶏舎に長靴をつるす、鶏舎内にポリバケツを設置するか、一部鶏舎を区切って場所を作るなどの方法を提示し、農場側に一番やりやすい方法を選択させた。このように農場それぞれの事情に合わせた、現実に即した方法を提示することが農場を動かすためには必要である。



②鶏舎の補修

今年度は例年以上にHPAI発生のリスクが高いことを早いうちから農場側に頻繁に啓発し、アジア圏での発生状況などの情報提供を頻繁に行っていたために、今回は大規模な鶏舎の改修や、従業員が行う改修を行った農場がかなりの数になった。しかし、鶏舎を改修した経験のある大工に依頼できる、農場内に大工に対し具体的な指示ができる従業員を配置できるような農場はよいが、そういったノウハウ、人材のない農場は、的確な改修ができずに、時間がかかっていた。そういった場合、家保が改修例を優良事例として、改修が滞っていた農場に提供した。情報の橋渡しをすることで、管内すべての農場がスムーズに、迅速に改修が完了した（図5、図6：図5の事例を図6の農場に提供）。

また、従業員が改修した場合も、改善途中に巡回を行い、進捗業況と、改善の善し悪し



を確認し、必要があれば、改善案や他農場の優良事例の提供を行い、スムーズに改善されるよう努めた。

③防鳥ネットの破損

防鳥ネットは、修繕の他、必要な箇所に設置されていないなどの問題点があり、農場によっては、指摘箇所が多く、指導にも時間と手間を要した。

進捗が遅い農場に関しては、農場任せにせず頻繁に巡回し、状況によっては、家保職員のほか、普及所の職員にも協力を仰ぎ、農場と一緒に修繕を行った。

改修などの意識が低かった農場では、最初はすべて家保が具体的に提案、指示しないと進まなかったが、一緒に修繕していくうちに、結果として具体的に目あわせしたことになり、最終的には従業員だけで的確に修繕できるようになり、状況に応じて自分たちで補修できるようになっていった。

④その他の衛生対策

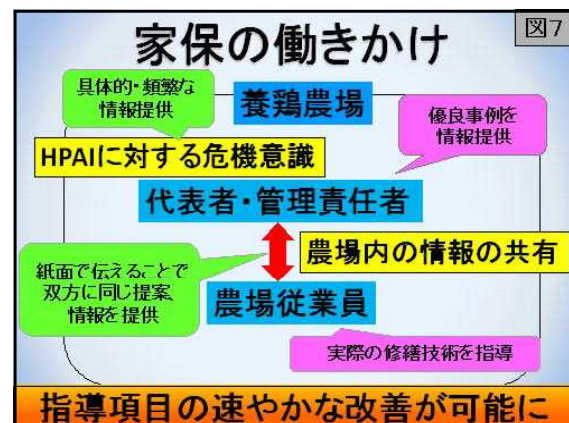
今回指導していく内に、石灰散布や手のアルコール消毒など、遵守されるべきそのほかの衛生対策も、適宜行う農場が増加した。

これは、家保の働きかけにより、農場内でHPAIに関する情報が周知され、危機意識が上がり、こちら側が求める対策の必要性が理解しやすくなったこと。何度も巡回する内に家保の職員と顔見知りになる従業員も増え、指導に対する抵抗感が少なくなったためと考えている。

5 家保が行った働きかけ

今回の指導において、家保が行った働きかけを図7に示す。

今回聞き取りで浮かび上がった問題を改善させるために行った働きかけは、緑色の吹き出しで示している。この働きかけによって、問題のあった農場全体の意識が向上し、農場内での情報共有が可能となった。さらに、ピンク色の吹き出しで示したように、優良事例や補修の技術を提供するなど、農場が実際に改善しやすくなるよう働きかけたことで、指導後、速やかに改善が行われるようになった。このように、問題の根底を見極めて働きかけたことにより、最初に農場の体制そのものが改善され、変化した農場に対し、家保が必要に応じてフォローするという体制が形成され、農場と家保が連携した、指導項目の速やかな改善に向けた体制をつくることのできた。



6 まとめ

今回、要改善農場の体制そのものを改善したことで、結果として、管内の衛生レベルを

向上させることができた。また、家保が働きかけたことによって、農場の HPAI 発生防止に対する体制をつくることが出来、農場自ら、自発的な衛生対策を実施するようになり、指導項目の改善以上の成果を得ることもできた。

養鶏農場は、防疫上の観点から、管内の養鶏農場の関係者を一堂に会して衛生対策や、鶏舎の補修方法の研修を実施するということが難しいという特有の事情がある。加えて、管内では農協の職員などが出入りすることもほとんどなく、外部からの情報に乏しい農場が多い。そのため、農場を直接巡回し、改善指導する家保の働きは非常に重要であると考えられる。今回の経験から、農場を動かすためには、画一的な指導だけではない、柔軟な対応が必要であるとあらためて痛感し、今後の農場指導にも生かして生きたいと考えている。